

インドを数量化する

——帝国主義期の英領インド国勢調査プロジェクト——

三瀬利之

1. 問題関心

- ・帝国主義と植民地科学の関係
 - ・ Said以降の議論：植民地科学は、帝国の政治的・経済的支配の実用的な道具（あるいは同意形成装置）。その偏向、政治的力学の読解（と糾弾？）¹。
 - ・ 近年の方向性：完全に帝国の利害関心から独立していたわけではないが、相対的な科学的自律性も有していたとする視点。その具体的な実相の把握と腑分け²。
- ・ 植民地政策の分析手法
 - ・ 「植民地化」や政策の立案・決定の主体を、「植民地権力」「植民地官僚」「イギリス側」等の漠然とした用語でなく、具体的に析出（ベンガル政府、インド省、内務省事務次官、Risley・・・等）する作業。（実体としての「帝国」「植民地国家」は、分業化が進んだ環節社会）
 - ・ 「複数の構想の競合やその取舍選択の過程、政策が実地に運用される際にこうむる変容」³。
- ・ 歴史実証主義的アプローチ
 - ・ 外部に公表することを前提に、事後的に執筆・編集された「報告書」「年報」だけでなく、各省庁の「稟議」段階での内部資料（Proceedings ファイル、特に Notes, K-Wの部分）の活用
- ・ 「植民地的構築」論への含意
 - ・ 「カースト・部族・人種」統計と「カースト」「カースト制」の関係の問題
「植民地主義colonialism」という神話：（神話素）西欧のインド・イメージの投影、（ヴァルナ）分類、規律化、分割統治、支配への同意形成装置、インド側の内面化／抵抗・・・⁴
（「属人法」の原則とともに古典籍を法源とした司法廷、地位上昇運動における上位ヴァルナの主張からの連想？）
（・インドに関する当時の支配的言説に対する「対抗言説」の生産の場であった初期～中期の国勢調査？）

2. 対象

- ・ 英領インドの国勢調査（Census of British India）
 - ・ 1871年から1941年まで10年毎に実施された人口動態調査（本発表の主対象は1921年まで）
 - ・ 1881年から一斉悉皆調査、1891年には藩王国領の多くを含んだ全国的調査
 - ・ 氏名、性別、婚姻状態、職業、社会的出自（カースト、部族、人種、ナショナルリティー）、宗教、母語、読み書き、障害、等々の網羅的調査
 - ・ 「帝国地誌 Imperial Gazetteer」や「地租査定報告書 Settlement Report」等と並ぶ一次資料
 - ・ 植民地期のカースト研究の母体、「行政官人類学者」の揺籃地のひとつ⁵

¹ 英領インドの植民地人類学に関しては、Bandyopadhtay(1985), Bates (1997), Morrison (1984), Pinney (1988, 1990)などを参照。

² 水野 (2006)、パイエンソン (1989)。やや文脈は異なるが、Pels & Salemink (1994, 1999) も参照。

³ 松田 (2009:21)。Cooper & Stoler (1989)も参照。

⁴ Appadurai (1993), Bayly (1997), Cohn (1987), Dirks (2001), Maheshwari (1996), Pant (1987), Peabody (2001), Samarendra (2003), Trautmann (1997), 関根 (1997)、藤井 (2003)などを参照。

⁵ Bêteille (1996), Roy (1921), Ghurye (1932)。

・英領インド国勢調査の「カースト・部族・人種」統計の特徴⁶

- ・大英帝国のなかでは例外的な、社会的出自集団に関する調査の結果
 - イギリス本国：職業、経済情報の重視。宗教は1851年だけ、言語は1891年以降。
 - 他の植民地：とくに人種・混血への関心（1909年『大英帝国国勢調査委員会報告書』）
 - 東インド会社期：農業人口、ヒンドゥー／ムスリム、家屋の種類への高い関心
（「カースト」「部族」「人種」の用語の互換的な使用と曖昧な概念規定）

- ・網羅性と規模の大きさ
 - ピークは1891年と1901年（最終的にまとめられたカースト・部族は2378）
 - 請願運動の活性化（ただし、「歴史的帰結」と「意図」を読み違えない）
 - 1921年以降は縮小、周縁化（「宗教」統計の重要性の増大）

- ・「カースト・部族・人種」統計の分類方針の変遷（表2参照）
 - ・1871～1901年までの分類
 - 1871～72年（事前の指令はなく、報告書（1875年）で分類）
 - 7分類、一部に「ヴァルナ」に類するカテゴリー
 - 1881年 ①ブラーマン、②ラージプート、③「その他」のカースト
 - 1891年「伝統的職能 function」に基づく分類
 - 1901年「現地の総意として認められている社会的序列」に基づく分類
 - ・1911年以降、アルファベット順（ただし1931年には一部で職業別）
 - ・1941年以降、指定部族、指定カーストを除いて、分類は提示されず

⇒むしろ、アルファベット順・ヴァルナ別以外の分類法の模索（と失敗）

- ・「宗教（とくにヒンドゥー教）」との関係
 - ・1872年ベンガルの H. Beverley の分類シェーマ（表4参照）
「ヒンドゥー教徒」の下位区分としての「カースト」

 - ・1891年の集計表における「カースト」欄の「宗教」欄からの独立（表3参照）
「カーストは、ヒンドゥー教徒に限定されない」（もともとは1869年アラハバード・コミッショナー M. Court の疑義。表8参照）の見解を支持。ムスリムの「カースト」も記入⁷。

なぜ1891年なのかという問題（1881年調査の段階で「カーストは社会的制度」との見解が、現場の官吏で支配的。分離の指令があったが、直前に撤回された（表8参照）

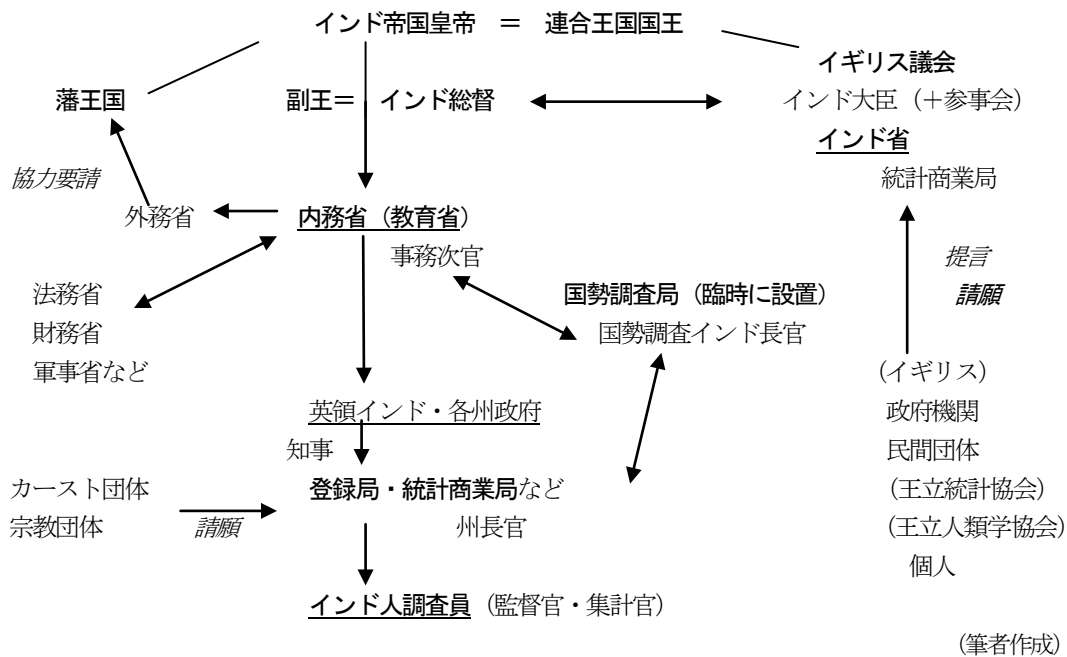
＝「カースト・部族・人種」統計を特徴づける紆余曲折とちぐはぐさ（原則の欠如、試行錯誤・・・）
「結果」（≡「報告書」）や当時の社会情勢だけから「意図」や（政治的）力学を類推する限界

⁶ 以下の事実関係の詳細については、拙稿（三瀬 2000, 2002, 2004., Mise 2009）を参照のこと。

⁷ ただし、ムスリムの「カースト」には、実質的には、血統（社会的身分）、（おもに北西辺境州の）部族、（改宗者の旧）カーストなど、異なる社会的範疇が混在。

・国勢調査に関連する植民地機関

- ・国勢調査は、巨大な国家プロジェクト、10年に一度の一大イベント
- ・内務省での発議（2~3年前。恒常的な法が存在しないため）→ インド省との通信
 - 実施の決定、国勢調査局の設置（担当長官の任命）
 - 各州政府、各省庁との折衝（民間団体、個人からの請願・要請の吟味）
 - （政府上層部では）調査方針・内容の決定、（村落・都市部では）調査の実働部隊の組織と訓練
 - 事前調査の実施（1ヶ月弱）→ 調査日（通常2月~3月）に修正→ 集計 → 報告書の執筆



3. 「稟議」資料の分析から浮かびあがる英領インド国勢調査の性格

3-1 事案処理の特徴

- ・中央集権的、上意下達式でも、現場主義でもない、最終審級が想定できない分散システム。
cf. 内務省政務局との相違？

・重要な役職や機関

担当長官職：インド国勢調査担当長官 (CCI)。国勢調査の担当官。内務省の国勢調査局（臨時に設置）。3~4年の任期。ただし全権委任されていたわけではなく、また、必ずしも社会調査や民族誌調査、カースト問題の専門家ではなかった。

国勢調査州長官 (PSI) は、州レベルでの実際の集計活動の担当官。報告書の執筆。

監督官・集計官（末端の実働部隊）：情報の収集、集計、監督などの業務。

インド人役人、地域の識者、学校教師などの民間人より構成。インド社会の特定の階層からリクルートされたが、その選抜・選任方法には、州、県、郡毎の地域差あり。事前の討議では、集計官の候補として、ザミンダールの使用人、警察などが検討されたが、業務の遂行にはパトワリー（「村落会計官」）がもっとも適当とされていた。また「上位階層の偏見」を排除するため「下層階層」のための特別集計官も検討されたが、実現せず⁸。

⁸ Report, Census of Oudh, 1869, Appendix C. 末端の集計官の性格（社会階層）が、集計内容に及ぼす影響については、Dewey (1978) や Oddie (1981) の研究にも言及がある。

インド省：ロンドンにあるイギリス政府の機関。本国の省庁、民間団体、個人からの提案や請願を選別して送付。事務の事務的業務を遂行したが、まれにH. WaterfieldやC. Bernardのような人物が重要な役割を果たすことがあった。インド省各局の**局長**や、「**インド大臣諮問委員会**」の**メンバー**は、退職したICSが就任することが多く、このためインド政策やインド観は保守的で現場の認識と異なる（時代遅れになる）傾向があったとされる⁹。

地方政府の長：(州) 知事やチーフコミッショナー。PSIの上官で、形式的な命令系統では、CCIよりも（当然）上位。このためCCIのPSIにたいする統制権には限界（帝国編と各州編のフォーマットの標準化の限界）。1880年代には、Ripon総督下で任命された州知事のなかにも、**（例外的に）**民族学的な調査に対して好意的な人物が多く（北西州知事A. Lyall、ベンガル州知事R. Thompsonなど）、調査の公的支援の実現の後押しをしている（H. Risleyのベンガル民族誌調査1885~1887など）。

内務省事務次官¹⁰：インド総督参事会メンバーを除けば、高等文官最要職の一つ。イギリス側、地方政府、インド中央政府の他の省庁（とくに外務、法務、財務）、直属のCCI、そして（1919年以降は）立法参事会などからの指令・情報の結節点。必ずしもすべての事案の意思決定に参加したわけではなかったが、大きな発言力を有していた（たとえば、1881年のカースト欄分離問題におけるBernardとTupper。表8参照）。歴代の事務次官（資料10参照）は、A. LyallやC. Tupper（代理）、1900年代のH. RisleyやH. Stuartなどの例外を除くと、社会調査の素人で、発言等から判断する限り、インドの民族誌的情報（カーストや部族、民間信仰・・・）への関心は、かなり低かったと思われる（例えば、1901年調査（表6参照）でのJ. Hewitt）。

3-2 「カースト・部族・人種」統計の目的・動機

- ・「カースト・部族・人種」統計や民族誌的情報は、国勢調査の意思決定に参加しうる（上層部の）多くの植民地行政官にとって、重要でなかった（「職業」統計の重要性）。

カースト統計削減の動議¹¹

1877年の国勢調査委員会の討議、1901年国勢調査に際しての討議（表6参照）・・・

1918年産業委員会の提言（1921年に縮小）、1941年調査におけるカースト情報の不掲載

インド民族誌調査（1902~09）に関連してのコメント¹²

「この枠組みは、明らかに、一人の熱狂的な人物（注：Risley）によって促されている」が、成果は、有能で協力的な州長官がいるかどうかには依存（インド省のC. Bernard）

「最近のインド高等文官は、インドやその人々へ関心を失い、余暇の時間を、退職して年金暮らしするまでの日数を指折り数えることに費やしているといわれている・・・」（H. Risley）¹³

1941年CCIのYeattsの総括

「（国勢調査における）人類学的な関心は、想像しうる限りもっとも個人的なもの・・・」

「国勢調査と人類学のこの過度の結びつきの不幸な結果・・・」¹⁴

⁹ Kaminsky 1986.

¹⁰ 国勢調査や民族誌調査は、内務省の管轄であったが、内務省の業務軽減のために、1921年は教育省に移管された。しかし1923年には、国勢調査のみ内務省に戻され、民族誌調査関連は教育省に残った。

¹¹ Home Dept. Pro., Public, nos.54-104, Dec., 1879, NAL. なお、調査項目の大幅な見直しが行われた1901年に関しては、Home Dept. Pro., Census, nos.6-9, Jul., 1899, NAI, 同 nos.28-35, Jun., 1900 に詳細な議論がある。

¹² Note, dated 19th Jan.1900, No3306, 7th Dec., 1900, Revenue & Statistics, L/E/7/440, IOR.

¹³ Bradley-Birt,のサンタル族に関する研究書の序文によせて(1905 :5)

¹⁴ Report, Census of India, India, 1941, p.2.

- ・国勢調査の実施にたいする温度差
 - ・当初、人口調査、センサスは本国政府の主導のもとに実施
 - 国勢調査は、統治対象の監視というより、統治主体の監視の目的（統治の効率性の判断材料）
 - W. Sykes (1790～1872、ボンベイ軍、東インド会社社長、統計協会会長) の統計の対象
 - ：インド軍、官僚、疾病・・・
 - 東インド会社に統計局設置 (1847年) の背景 (←・・・1833年の特許状更新)
 - 最初期 (1853年) の北西州において近代的なセンサス (全数調査) 実施の背景
 - ・他方で、全インドで、同時に、標準化した方法で集計する「国勢調査」へのインド政府の消極性
 - 国勢調査の中止・順延の動議¹⁵
 - 1861年 (「インド大反乱」の影響で中止)、1871年 (主に財政的問題、同時センサスの断念)
 - 1891年 (順延の動議、結果的に実施)、1941年 (第二次大戦の影響、規模の縮小)
 - ・国勢調査のカースト統計や民族誌調査の「推進派」の実施の理由
 - ・1901年調査における討議の事例参照 (表6)
 - インド社会の基盤、軍人の雇用、学術的価値 (幼児婚の解明、Brahmanizationの解明)・・・
 - ・H. Risleyの主張 (民族誌調査の目的)
 - 「科学的目的」
 - 「現在でもインドに残存しているアーリヤ・非アーリヤの野蛮・準野蛮な習慣の総体」が
 - 「インドにおける急速な教育の普及と実践的知性の成長によって、次世代には、民族学者の特別な関心となる多くの慣習が放棄される」前に、科学的に解明すること。
 - 「行政的目的」
 - 「インドの行政は、歴史や先史の問題の解明によって、より効率的になることはない・・・
 - そのような調査は本質的に贅沢である。・・・それらは現実の行政の仕事には直接は関係しないとするのである」といわれている。しかし、「このような見方は、一見まことしやかだが、以下の事実を見落としている。すなわち、現地社会は、下位区分 (引用者注：カーストや部族) のネットワークからできあがっており、それは生活のあらゆる分野に影響を与える規則によって支配されている」ことである。このため、「ベンガルの民族誌的調査、そして人々の習慣の記録」、とりわけ、「読み書きできない大部分のカーストの人々の間で、実際に実践されている習慣についての正確な知識を持つこと」は、低カーストの婚姻と離婚の問題、幼児婚の抑制、未亡人の再婚の奨励、災害の救援活動の在り方、初等教育の運営や土地問題などにおいてきわめて役立つものとなる¹⁶。
- ＝カースト統計や民族誌研究の推進派 (Risley, Ibbetson, Tupper など) や理解者 (Lyal, Curzon 総督など) は、植民地期を通じて、植民地体制内部では少数派
- ＝ (新興の学問である「(進化論) 人類学」の「仮想敵」：インドの文化的固有性や地域の事情を無視したり (功利主義)、古典籍や文献に基づいた過去のイメージを現在に投影するのではなく (東洋学、文献学)、観察される客観的事実に基づいたインドの理解 (と行政)

¹⁵ "Home Public Letter to Secretary of State 1858-to 1859. S.No.147", Home Department, Statistical, No.1 of 1859, April the 6th, HDP, Public, no.108, 1st Apr., 1871, NAI, FCD, February 1889.Accounts and Finance (miscellaneous) No.97, NAI, HDP, Public, 1939, 45/27/39-Public, NAI.

¹⁶ "Extract from a Note by H.H.Risley on Ethnographical Enquiry in Bengal", Financial Dept. Pro., Miscellaneous, no.49, Mar., 1887, SAWB.

3-3 カーストの分類法の変遷の背景

・調査の専門部局の欠如のため、調査方針が持続せず、その時々が事情が分類に反映された。

- ・1872年：インド側に統括職がなかったため、インド省の H. Waterfield が執筆（1875年）
ヴァルナの分類を採用したが、その限界を指摘
- ・1881年：ブラーマン、ラージプートの下に、カーストの優劣をつけた指令（ヴァルナの分類）
→集計段階で問題が発生し、序列は撤回
（背景）：インド政府は、当初、分類に消極的（否定的）
ブラーマン、ラージプート、その他、の三分類であったが、
インド省（Waterfield?）が、序列判定を含む分類の「提案」
（ロンドンの、一部の旧世代の考え方が反映された）
しかしインドの実情に対応しておらず、撤回、という経緯¹⁷
以降、インド省からカーストの分類の提案はなく、内務省内部でも議論されず
（「職業」の分類法は、継続して議論された）

= 「カースト」関連は、**相対的に**、CCI の自由度と発言力が増大

（CCI の権限の基盤は、全般的に脆弱で限定されていた）

= （むしろサイレントマジョリティーの「無関心」のなかで）、西欧の科学界の動向や関心
に対応した「科学研究」（トーテミズムや婚姻の起源論など）の余地が生まれた？

（cf. 1890年代のイギリス科学振興協会の一連の民族誌的調査の提案）

・1891年調査と1901年調査：それぞれCCIの個人的な見解

J. Baines（ボンベイ管区。職業統計の専門家、カースト統計に懐疑的、のち王立統計協会会長）

→「職能」別分類（ただし同時期に、カースト=職業ギルド起源論の存在）

H. Risley（ベンガル州。サンタル族地域での任務、Hunterの統計調査、ベンガル民族誌調査を経て、欧州では「行政官人類学者」として有名。フランスの形質人類学を導入し、総合人類学の確立。事務能力にも優れ、行政官としてのエリートコースも辿った）

→「社会的序列」に基づく分類（社会慣習+人種混血度・身体の形質の考慮）

（新興科学であった人類学・民族誌学の理論と手法）

Risleyのカースト起源論=アーリア人種と先住人種の不断の混血と内婚化に起源

「カーストの社会的地位は、鼻の幅に反比例する」の有名な公式

ただし、統計での分類法と、個人がもつカースト観（理論）は必ずしも一致せず

（∴リスト（表）化は、複雑性の縮減のもっとも単純な方法）

例えばRisleyは、カーストを、同一の組織原理（内婚、職業世襲・・・）に基づいて均質に編成された、人口の規模（と社会的地位）においてのみ異なる集団群としてとらえるのではなく、個々のカースト集団の質的差異を問う視点（カーストの類型論）も展開。¹⁸

①部族的カースト、②機能的（職業的）カースト、③セクト的カースト、④混血によって形成されたカースト、⑤民族的カースト、⑥移民によって誕生したカースト、⑦新しい習慣の形成によって形成されたカースト

（→後のカースト・パンチャーヤットの類型論などにつながる）

¹⁷ HDP, Census, nos. 1-3, Mar., 1880, NAI. HDP, Census, nos. 4, Dec., 1882, NAI.

¹⁸ Report, Census of India, India, 1901, pp.521-523.

- ・ 1911 年以降
 - ・ Risley の指令が地位上昇運動を刺激し、分類の試みが後退¹⁹
 - ・ 周辺の階層 (ST、SC へ) への関心の推移
 - ・ 分類の本質的限界の認識 = 実体論的カースト論の後退
 - ・ H. Rose (1901 年パンジャープ州) : パンジャープ州におけるカーストの編成原理の 4 類型。① *Khatra* 型、② *Rajput* 型、③ *Jat* 型、④ *Bania* 型²⁰
 - ・ E. Gait (1911 年 CCI) : 自己把握 (internal view) は「カースト」で、他者把握 (external view) は「ヴァルナ」で行うことなど、複数の民俗的 (エミクナ) 集団分類法の存在 (とその状況依存性) を指摘
 - ① *varna* = 4 ヴァルナ + 不可触民。再生族 / 非再生族の区分
 - ② *jāti* (「近代カースト」) = 共通名と伝統職業を共有する社会集団
 - ③ サブカースト = 内婚集団。
 - ④ 外婚集団 = *gotra*, *got*, *kul*, *illam*, *phaid* と位置付けた²¹。
 - ・ E. Blunt (1911 年連合州) : *varna*, *zāt* (≒種)、*qaum* (≒部族)、*biradari* (≒友愛団体・同胞)、*nika* (起源)、*ban*, *mul* (家柄)、*al*, *kul* (家族)、*gotra* (男系集団)、*panchāyat*, *jajmāni* などの現地語概念を使った説明 (現地語表記および訳語は、原典に従っている)²²
 - ・ L. Middleton (1921 年パンジャープ州) : 「植民地的構築」論 (植民地体制下でのカーストの「結晶化」と永続化の批判)²³
ただし、流動的な労働者市場の形成を阻害していることの批判か？
(同時代のアーリヤ・サマージ (協会) の批判とは文脈が異なる)

3-4 報告書で展開されたカースト論の「代表性」の問題

- ・ カースト関連の多くの事案 (分類法、報告書の内容) に関しては、歴代の CCI が重要な役割。しかし、人選理由や当時の人材を鑑みると、必ずしも公式見解でも、主流派の見解でもなかった (Crooke や Hunter などが、国勢調査に直接関与していない)

・「攪乱」要因

インド高等文官にとって、CCI 職はセクレタリアート系では中程度、他の人事に左右された。
(「度重なる配置換え」という、植民地インドの官僚機構の構造的問題)

州知事クラス > インド総督参事会メンバー > 中央政府各省事務次官 >>
 地方政府の首席事務官など > CCI
 > 各種委員会の委員長、地方政府の事務官 > 「県長官」

¹⁹ 「国勢調査官たちはこの後、地位の修正を求める膨大な請願書の山に悩まされることになった」(J. H. Hutton, *Report, Census of India, India, 1931*, p.433)。

²⁰ *Report, Census of India, Punjab, 1901*, pp. 302-338。

²¹ *Report, Census of India, India, 1911*, pp. 363-368。

²² *Report, Census of India, 1911, United*, pp.332-355。

²³ 「彼らの本当のカーストを見つけてあげないと、世襲職業名でラベルを貼り付けた・・・」(*Report, Census of India, Punjab, 1921*, p. 343)。

- ・長官職への人選理由

年齢（手当との関係で若年層から起用（∵Hutnerは除外。例外：Elliott, Plowden, Risley）
州長官経験者（例外：Elliott, Risley, Hutton）
組織の統括力、交渉力、身体的適応性・・・（「学者肌」は敬遠：例えばCrooke, Burnなど）

- ・1891年人事：Baines人事、当初はIbbetson、Stokesに次いで三番手の評価²⁴。
- ・1901年人事：Risley抜擢はかなり例外的（順当ではStuart?）。Gaitが補佐役で抜擢。内務事務次官代理であったA. Fraser（のちベンガル州知事に）の重要性²⁵。飢饉の影響で、事前に縮小が討議された1901年調査へのRisleyの起用が持つ歴史的意味は大きい（結果的にインド史上で最大規模のカースト調査）
- ・1921年人事：Marten。事前の評価は高くなかったが、内定者が直前に辞退。「持ち回り制rotation system」なども考慮（中央州から初）²⁶

＝組織の統括力や体力が重視され、民族誌的知見は殆ど考慮されず（例外は1931年Hutton）。
にもかかわらず、その人物の個人的なカースト観が、公式見解として受け取られた。
（端的に総括すれば、Risleyで、当時の国勢調査関係者を代表させることはできない）

4. 「植民地的構築」論への含意（見通し）

- ・カーストの実体化、地位上昇運動の活性化における国勢調査の役割を過大評価すべきではない。
帝国主義期の国勢調査の目的は、（少なくともカースト統計に関しては）分割統治や規律化ではなく、インド社会の実情調査（ただし1930年代以降は異なる展開?）。
例えば国勢調査では、ヴァルナ分類の指令はない（Risleyを除くと序列化にも消極的）。

＝問題の本質は、植民地体制下での低開発（搾取）とそれに伴って生じた資源の稀少化と区分の亀裂化
＝「規律訓練」「内面化」の議論が妥当しうるのは、150万余りの集計官・監督官
（＝B. Cohn（1987）、A. Appadurai（1993）の結論）
（そもそも「カースト団体」の請願運動の活性化を過大評価すべきでないという議論²⁷）

- ・カーストは「植民地的な捏造」なのか、あるいは「インドの本質」なのか、という二者択一の議論ではなく、インド社会のなかの何（誰）を代表させ、全体化したかという、選別の恣意性の問題として捉えるべき
（事例）「ベンガル民族誌調査」においてH. Risleyは、「社会的序列」の調査のために、4種のリストを配布。各郡の役人や識者に修正の意見を求めた。
実は、うち3種はBrahmanが作成、しかし東ベンガルに配布されたリストCはKāyasthaが作成、そしてそこではKāyasthaが序列の二番目に位置付けられていた。

これに対して、さまざまな回答パターン

Rajani Nath GhoshやSyam Kishore Boseなど（Kāyastha）：リストCの支持

Tara Prasad Chatterjee（Kulin Brahmanバルドワンの郡長官）：序列の修正

『ブラフマ・プラーナ』や『パドマ・プラーナ』などの記述、ベンガルでは「カヨストは聖紐の携帯が許されていない」ことを根拠にシュードラ説²⁸

²⁴ HDP, Census, nos.26-90, Mar., 1890.

²⁵ HDP, Census, nos.1-3, May, 1899. この人事は当時から「特別の理由」があったとされていた（1921年の人選過程で言及）。

²⁶ Education Dept. Pro., Census, nos. 1-12, Oct., 1919.

²⁷ Carroll（1978）。

²⁸ “Letter from Tara Prasad Chatterjee”, dated 10th January 1887, Mss. Eur. E101. IOC. しかし彼は、現実におけるカヨストの経済的な台頭を認めている。なお、人名の表記は、以下、書簡に記された表記に従った。

Ram Chandra Dhar (Brahman) : 序列の微修正。地域の現状に鑑みて、ボイッド
 >カヨスト>クシャトリヤ>ヴァイシャの順を提示。彼がボイッドをカヨ
 ストの上位とする根拠は、その食事規制の違い²⁹。

Rajendralal Mitra (Rajendrolal Mitro、高名なインド学者、Kāyastha) : 参考例。
 古典籍の「ヴァルナ間混血理論」に依拠して、第五のランク。

5. 展望

・まとめ

国勢調査や民族誌調査の推進派は、植民地行政のなかでは少数派（「カースト」よりも「職業」、1930年代以降は「宗教」の重視）。これが植民地期を通じた基調となる性格。これに加えて、時代ごとに異なる複数のファクターの組み合わせで（1880年代の州知事の配置、1901年のRisleyの抜擢など）、ある部分が例外的に突出し、その時期を特徴づけるような現象がうまれた。とりわけ英領インドでは、「ジェネラリスト型」の官僚の養成からくる「配置換え」の問題があり、人事の配置（外部の偶発的要因）に左右されるので、思想的・社会的なアプローチだけで因果関係を説明することの限界。

・「コロナ状況と知の力学」（このセミナーのテーマ）

- ・情報生産におけるせめぎあいと折衝。その際の「帝国」「植民地国家」の各セクターの個別検討
- ・（英領インドの場合）地域色（州や管区毎、県や郡毎の性格）や「学派」の存在の検討。
- ・官僚個人の検討（M. Weberの官僚像は理念型、教養官僚が多い英領インドには妥当せず）
- ・知識や情報が生産されるコンテクスト（特に対抗関係、ライバル関係の存在。例えば、植民地人類学にとっての功利主義や東洋学、RisleyにとってのBainesやパンジャブ学派、など）
- ・時代的推移の検討（コロナル/ポストコロナルの二分法では語れない）
- ・「リスク許容度」という考え方（「歴史の意図せざる結果」の余地大？）

二次文献

- Appadurai, Arjun 1993 "Number in the Colonial Imagination", Carol Breckenridge and Peter Van der Veer (eds.), *Orientalism and Postcolonial Predicament.*, University of Pennsylvania Press.
- Bandyopadhtay, Sekhar 1985 "The Raj, Risley and the Tribes and Castes of Bengal", *India Past and Present* 2-1: 41-52.
- Barrier, N. Gerald ed. 1981 *The Census in British India: New Perspectives*, Manohar Publishers.
- Bates, Crispin 1997 *Race, caste and tribe in Central India: The Early Origins of Indian Anthropometry*", Peter Robb (ed.), *The Concept of Race in South Asia*, Oxford University Press.
- Bayly, Susan 1997 "Caste and 'Race' in the Colonial Ethnography of India", Peter Robb (ed.), *The Concept of Race in South Asia*, Oxford University Press.
- Béteille, André 1996 "Indian Anthropology", Alan Barnard and Jonathan Spencer (eds.), *Encyclopedia of Social and Cultural Anthropology*, Routledge.
- Caroll, Lucy 1978 "Colonial Perceptions of Indian Society and the Emergence of Caste(s) Association", *Journal of Asian Studies*, 37-2: 233-250.
- Cohn, Bernard S. 1987 *An Anthropologist among the Historians and Other Essays*, Oxford University Press.
- Cooper, Frederick and Ann Laura Stoler 1989 "Tensions of Empire: Colonial Control and Visions of Rule", *American Ethnologist* 16-4: 609-621.
- Dewey, Clive 1973 "The Education of a Ruling Castes: the Indian Civil Service in the Era of Competitive Examination", *English Historical Review*, 88: 262-285.
- 1978 "Patwari and Chaukidar: Subordinate Officials and the Relativity of India's Agricultural Statistics",

²⁹ "Letter from Ram Chandra Dhar", dated 1st August 1886, Mss. Eur. E101. IOC

- Clive Dewey and A.G. Hopkins (eds.), *The Imperial Impact: Studies in the Economic History of Africa and India*, Athlone Press.
- 1991 *The Settlement Literature of the Greater Punjab : A Handbook*, Manohar.
- Dirks, Nicholas B. 2001 *Caste of Mind: Colonialism and the Making of Modern India*, Princeton University Press.
- Ghurye, G. S. 1932 *Caste and Race in India*, Kegan Paul.
- 1968 "The Teaching of Sociology, Social Psychology and Social Anthropology", Humayun Kabir et. al. (eds.), *The Teachings of Social Science in India (1947-67)*, A Universal Publication.
- Inden, Ronald 1990 *Imaging India*, Blackwell.
- Kaminsky, Arnold P. 1986 *The India Office, 1880-1910*, Greenwood Press.
- Maheshwari, Shiriram 1996 *The Census Administration under the Raj and after*, Concept Publishing.
- Mise, Toshiyuki 2009 "Caste and Census Administration in British India", *Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, 54: 27-46.
- Morrison, Charles 1984 "Three Styles of Imperial Ethnography: British Officials as Anthropologists in India", *Knowledge and Society*, 5: 141-169.
- Natarajan, D. 1972 *Indian Census Through a Hundred Years*, Office Registrar General.
- Oddie, G. A. 1981 "Christian in the Census: Tanjore and Trichinopoly Districts, 1871-1901", N Gerald Barrier (ed.), *The Census in British India: New Perspectives*, Manohar Publishers.
- Pant, Rashmi 1987 "The Cognitive Status of Caste in Colonial Ethnography: A Review of Some Literature on North West Provinces and Oudh", *The Indian Economic and Social History Review*, 24-2: 145-162.
- Peabody, Norbert 2001 "Cents, Sense, Census: Human Inventories in Late Precolonial and Early Colonial India", *Society for Comparative Studies of Society and History*: 819-849.
- Pels, Peter and Oscar Salemink eds. 1994 *Colonial Ethnographies. History and Anthropology*, 8: 1-352.
- 1999 *Colonial Subjects: Essays on the Practical History of Anthropology*, The University of Michigan Press.
- Pinney, Christopher 1988 "Representing of India :Normalisation and the 'other,'" *Pacific Viewpoint* 29: 144-162.
- 1990 "Colonial Anthropology in the 'Laboratory of Mankind'", C. A. Bayly (ed.), *The Raj: India and the British: 1600-1947*, Abbeville Press.
- Robb, Peter ed. 1997 *The Concept of Race in South Asia*, Oxford University Press.
- Roy, Sarat Chandra 1921 "Anthropological Research in India", *Man in India*, 1-1 : 11-56.
- Samarendra, Padmanabh 2003 "Classifying Caste: Census Surveys in India in the Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries", *South Asia* 24-2: 141-164.
- Singh, K.S. 1996 "Census and Ethnography", S.P. Mohanty and A.R. Momin (eds.), *Census as Social Document*, Rawat Publications.
- Srivastava, S. C. 1972 *Indian Census in Perspective*, Office Registrar General.
- Trautmann, Thomas R. 1997 *Aryans and British India*, University of California Press
- 関根康正 1997 「「不可触民」はどこへ行ったか? :南アジア人類学における「植民地主義と文化」という問題」
山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化』新曜社。
- パイエンソン、ルイス 1989 「科学と帝国主義」(佐々木力訳)『思想』779 : 9-28。
- 藤井毅 2003 『歴史のなかのカースト : 近現代インドの「自画像」』岩波書店。
- 松田利彦 2009 『日本の朝鮮植民地支配と警察 : 1905~1945』校倉書房。
- 水野祥子 2006 『イギリス帝国からみる環境史』岩波書店
- 三瀬利之 2000 「帝国センサスから植民地人類学へ : ハーバート・リズレイのベンガル民族誌調査にみる統計と人類学の接点」『民族学研究』64-4 : 474-491。
- 2002 「史料の歴史学 : 英領インド国勢調査資料の由来」森明子編『歴史叙述の現在』人文書院。
- 2004 「インド : カーストの周辺概念としてのトライブ・レース」青柳真知子編『国勢調査の人類学』古今書院